

フライング・夏

まそ

1. 08:10 3F廊下
2. 10:35～ 3F2-3教室
3. 12:30 3F2-3教室
4. 13:40 グラウンド

朝の空気を貫くように、かき一んと金属音が広がる。ボールは軽々と、高々と、空に向かって弧を描いた。

頬杖をつきながらわたしは、視線だけずらしてボールの行方を追っていく。ああ、あの単調で軽快なリズムは、まるで。

打ち上げてから捕球まで数秒。その数秒が呼吸のように、ひたすら繰り返されていく。あんなに高い位置から落ちてくるボールを、見失うことなくしっかり受け止めるなんて。

「こんな快晴の日によくやるよ」

やよいの言う通りだ。夏並みの熱量を含んだこの日差しが、彼らにとって邪魔にならない訳がない。

「それでさー、延長十回裏ツーアウトー三塁からの、井上のサヨナラタイムリー！」

すぐ側で、教室の喧騒に負けない歓声が湧いた。満面の笑みを浮かべたまりは、握りしめた拳をぶんぶんと上下させて興奮しきっている。

「ふうん。けっきょく延長までもつれ込んだんだ、昨日の試合」

やよいは、ハイテンションなまりとはまるで正反対の、穏やかな口調で答えた。その差に構うことなく、まりはなおも話を続ける。

「井上が打席に入った瞬間、もうね、これは打ってくれるに違いないってわかったんだよ……」

あ、井上ってドラフト二位で入ってきたルーキーなんだけどさ。まくし立てるようないつもの口調で、井上というらしい若手選手について語り出す。こうなると彼女の独壇場、なかなか止まらないことをわたし達は知っていた。やよいは、やれやれといった様子で相槌を切り上げ、もたれかかっていた壁から離れる。

「何見てるの？」

そう言ってわたしの視線を辿るやよい。彼女の声色は柔らかく、春らしい雰囲気をもとっている。

ちょうど、グラウンド沿いの道を走る群勢が目についていた。

よく見ると、いくつかの部がそれぞれ列を成してランニングを行っていた。陸上部は安定感があってリズムカル。サッカー部は脇目を振りまくりだけど、誰も息を切らしていない。そして野球部は、誰よりも一歩が大きくて、力強い。

「あは、ゆづきってばまた野球部ばかり見てるー」

振り返ると、まりがにやにやしながらこちらを見つめていた。そんなことないけど、と言うわたしの声は、窓から入ってきた風にかき消されてしまう。

「お？ あれは噂の西野君だ」

わたしの背後を凝視しながらまりが叫んだ。噂という言葉に首をかしげると、知らないの？ と言いたげな顔をする。

「西野といえば、たしか春の大会でスタメン出場してたよね」

「そうそう。しかも、クリーンナップだったんだって！」

流れるような二人の会話にふん、と頷く。この学校の野球部は、ここ数年連続で甲子園出場を決めている強豪だそうだ。そんなチームで、はじめから打つことを期待される打順に並ぶのは純粋にすごいと思った。

クリーンナップ……三番だったら、堅実に出塁してくれる安定感のある選手でしょう。四番は言わずもがな、か。五番なら相当な強打者だろうな。顔も知らない西野君の打撃力について、遠慮なく頭を巡らせてしまう。きっと五番のサードかな、なんて予想している隣で、やよいがさらっと呟いた。

「高梨のことだから、彼が同学年とかわかってなかったりして」

「いやーさすがにそれはないっしょ」

「え、二年なんだその人」

まりとわたしが口を開いたのはほぼ同時だった。

はっとして、まばたきを一つ。よほどわたしの表情が変化したのか、二人の視線がこちらに集中している。

「ええっと、そうだ、その西野君って何組なの？」

わたしは無性に照れくさくなって、少し早口で言葉を繋いだ。ついでに、今さっき背を向けたばかりの窓へ顔を向ける。原色みたいに鮮やかな青空が眩しい。

「はあ……ここまで来たら、ゆづきの無関心さには惚れぼれするわ」

遠慮の無いまりのため息が、びしばしと心臓の弱い部分をつつく。仕方ないな、という表情でやよいはわたしに教えてくれた。

「ほら、あの真ん中の。見覚えがない？ 私達と同じクラスなんだよ」

同じクラス？ まさか、と思いながら視線をずらす。

噂の西野君はすぐに見つかった。ランニングを終えた集団から少し離れて、グラウンドの方へと歩いている。その歩調は、走ってきた直後とは思えないくらいしっかりしていた。小柄に見えるのは、両隣の男子の背が高いせいだろうか。

じいっと見つめ続けたものの、同じクラスという言葉に合点はいかなかった。

そよ風が前髪を数束さらう。彼は帽子を取り、ユニフォームの袖で汗を拭っている。

「……あ」

つい、声が漏れた。さすがに見ればわかるかー、と二人は笑う。けれど、そうじゃなかった。

目、合っちゃった。帽子をかぶり直す瞬間にこちらを見上げた、西野君と。

「ゆづき一、宿題見せて」

遠くの席からやって来て、わたしをゆづきと呼ぶ、まり。彼女は、『選手』をこよなく愛する野球ファンだ。プロ野球はもちろん、学生野球にも精通していて、それぞれのチームに推しの選手がいるらしい。いつの間にか野球の話題に話が飛ぶのは、大抵まりの仕業である。

「あ、高梨。この問題、間違ってるよ」

広げたノートを指さしながら、わたしを高梨と呼ぶ、やよい。彼女もまた、『応援』に全力を捧げる野球ファンだ。野球観戦となると、とにかく人が変わってしまう。やよいは、わたしやまり、その他全ての人を平等に名字で呼ぶ。

二人とは数週間前、この教室で出会った。共通点は野球くらいしかないはずなのに、自然と一緒に行動するようになっていた。

わたしは指摘された部分を、消しゴムでぐりぐり消していく。その隣でまりが、のんびりとノートを書き写している。

「それにしても、ゆづきが西野君の存在に気付いてなかったとはねえ」

シャーペンの頭をかちかちと押しながら、今朝の一件を持ち出したまり。けらけらと笑って黒板の方を見ている。

「その話はいいでしょ、もうちゃんと覚えたんだから」

そんな彼女を横目に、わたしはノートを見下ろしていた。間違いを直し終えても、ずっと。

そちらを見なくてもわかっていた。黒板の右斜め前に、西野君の席があることを。

今朝以来、わたしの脳内では、あの一瞬の出来事が何度も繰り返されている。と言っても、それによってどきどきしたり胸が弾むことはなかった。『西野』という名字が耳に入ると、不意に視線がそちらへ揺れてしまうだけだ。そのせいで席の位置だって、彼がこのクラスの密かな人気者であることだって知ってしまった。

「それって、間違いなく興味はある」

でしょう、とやよいはにっこり微笑む。彼女は時々こうやって、人の心を見通しているかのような発言をしてくる。わたしが口を開く前に、それを聞いたまりの目が、笑みを隠せずになやりと横に広がった。本当に、この二人ときたら。

「二人とも次移動でしょ、もうすぐチャイム鳴るよ」

わたしは否定も肯定もせず、ノートをぱたんと閉じた。

授業の始まりを知らせる、半音狂ったチャイムが鳴り響いても、先生はまだやって来ない。

先ほどまで賑やかだった教室が、あっという間にがらがらだ。二人を含めた半分以上のクラスメイトは、皆生物室へ行ってしまった。ここにいるのは文系の子たちだけである。

小さなざわめきの中、はあ、と誰にも聞こえないようなため息。

頬杖をつきながら、筆箱のストラップを指ではじく。かもめのマスコットキャラがゆらゆら揺

れる。

「それ、マリンズの？」

なんて不意打ちだろう。

その声に反応して、わたしの指はびくんと跳ねた。聞き慣れない声。驚いて、勢いよく顔を上げる。

目の前にいたのは、他でもない、西野君だ。

一瞬誰なのか理解出来ずに、まばたきを二つもしてしまった。西野君だとわかってすぐに、視線が少し下を向く。彼は、そんなわたしを不思議に思う素振りなんて見せず、こちらを見つめている。

どうしてわたしに話しかけてきたんだろう。頭の中が疑問でいっぱいになり、机一つを挟んだ空間には沈黙が広がってしまう。

西野君は、わたしと同じように動きを止めていたストラップに触れた。ちょこんと飛び出したくちばしを、指先で軽く撫でている。そんな動作を眺めながら、ようやく彼の発言を思い出す。

「う、うん。わたし、マリンズ好きなんだ」

うまく口が回ってくれてよかった。衝撃のせいで使い物にならない頭を、精一杯フル回転させてひねり出した答えだった。

すると、彼の口元が大きく緩んだのが見えた。

「そうなんだ。実は、俺も」

その言葉を聞いて、わたしはようやく彼の顔をまともに直視することが出来た。今日だけで、これが二度目。西野君の差し出す携帯にも、彼のはにかむ口元にそっくりのかもめのマスコットが付けられていた。

「マリンズファンってそんないないのにな」

嬉しそうにストラップを見せてくれる西野君につられて、思わず微笑む。そうだよ、と頷くわたしの顔を見て、彼は何かを思い出したような顔つきになった。

「そういえば朝にさ、俺」

西野君がそう切り出して間もなく、勢いよく扉が開け放たれた。先生だ。

「すまん、遅くなって。すぐ始めるから席つけよー」

あっ、と声が出たのと彼がまたな、と呟いたのはほぼ同時だった。わたしが言葉を継ぐより先に、彼は早々と席についてしまった。